

生活科における身近な自然物と対話をしながら豊かな感性を働かす栽培活動の研究

山尾 芙左

愛知教育大学大学院 教育学研究科

A study of cultivation activities that exercise rich sensitivity while interacting with familiar natural objects in living environment studies

Fusa Yamao

(Graduate Student, Aichi University of Education)

I はじめに

1 関心の所在

加納は、「低学年児童から質の高い気付き、深まりのある思考を引き出すような表現活動には、子どもたちの心を大きく動かし、いつまでも心にとどまってしまうような忘れられない感動体験が存在しているのである」¹⁾と述べている。生活科における栽培活動での体験は、大人になっても忘れることのない活動の一つであると考えられる。幼児期に行われる栽培活動の様子を近隣の幼稚園・保育園にアンケートを実施した。アンケート結果から、幼稚園・保育園で栽培活動が活発に行われており、いろいろな種類の植物や野菜を育てていることがわかる。苗から育てていたり種の状態から子どもたちと一緒に育てたり観察している様子が読み取れる。幼児期の栽培活動とは異なり、小学校低学年生活科での栽培活動は、初めて一人一鉢でお世話をし、自分の力で植物を成長させることができたため、印象的なのではないだろうか。しかし、生活科の栽培活動の授業を受けた全員が、栽培活動に対して印象に残っているかと言われれば断定できない。今の栽培活動の単位では、子どもたちが忘れることのない内容の濃い授業をしていくことが必要なのではないかと考える。

小学校学習指導要領（平成 29 年度告示）解説生活編の生活科の内容編では、9 つの内容のうち、「(7) 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。」²⁾と記されている。栽培活動を通して、育つ場所、世話の

仕方を理解し、植物の成長の様子を観察することで変化に気づくことを大切にしている。また、植物に愛着を持って接するとともに、命があることに気付き、責任をもって育てることができるようにすることが大切だと考える。そして、「長期にわたる飼育・栽培の過程では、自ら関わっていくことで、児童の感性が揺さぶられるような場面が数多く生まれてくる。」³⁾と述べられている。ここから、栽培活動を通して、児童の持っている豊かな感性を引き出すことができるのではないかと考える。

斎藤は、アサガオ栽培の実践報告で種との対話をする中で「子どもたちは、耳に種を当てて種の声を聞いたり、口の近くまで種をもってきて優しい声で話しかけたりするなど、意欲的な姿を見ることができた」⁴⁾と述べている。そして、アサガオとのお別れの場面では、「はっぱがでてきて、つるがのびて、はながさいて、ほんとにいっぱいさいたり、のびたりしてくれてありがとう。」⁵⁾と子どもたちの振り返りシートに感謝の言葉が生まれたと報告している。アサガオをお世話する際に、対話活動を行うことで、自分で育てたアサガオに親しみを持ち、真剣にアサガオと向き合いながらお世話をすることができることがわかる。

生活科の栽培活動において、記録カードを使用することが当たり前になっている。一般的には観察記録的に行っている。筆者も子ども時代に観察記録として記録カードを使用していた。斎藤は、ふき出しを使用して対話できるよう工夫していた。対話活動の様子を記録カードに表現するためにふき出しを用いる。ふき出しを使用して対話的な記録カードを作

ることとどのようにアサガオと関わっていたのかが明らかになると考える。

2 研究の目的と方法

本研究の目的は、栽培活動を通して、児童の豊かな感性を引き出すことのできる活動と栽培活動の課題を踏まえて、先行実践事例から自分で名前を付けたアサガオとの対話活動と記録カードを工夫し、授業実践を通して愛着を持たせるための指導方法を考え、実践し、愛着を育むために手立てとして「対話活動」と「記録カードの工夫」は有効であったかを明らかにすることを目的とする。

研究の方法として、「豊かな感性」についての先行研究を考察し、生活科における栽培単元を構想する際の指導の観点を明らかにしていく。植物との対話活動の先行研究について考察し、アサガオ栽培で使われている記録カードの実態を教科書や先行実践から分析する。筆者は実習校での第一学年のアサガオ単元の様子から、子どもたちの実態を目の当たりにして愛着を持って植物を育てるにはどうしたらよいかという問題意識を持ち、アサガオを自分にとって特別な存在であることを実感し、愛着をもって育てることができる児童の育成を目指したい。

Ⅱ 豊かな感性を働かせる

1 幼児期の豊かな感性

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説第4節 満3歳以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容のうち、「(1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の園児や保育教諭等と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色などの自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」⁶⁾と述べられている。身近な環境や対象のものと関わることで、何かを感じたり心が揺さぶられたりするようになり、感じたことを表現することができる。そのために、児童が興味・関心を持ち、主体的に関わることのできる活動が必要である。前述の幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の「身近にある草や花の形や色などの自然の中にある音、形、色」というのは、小学校生活科の栽培活動に含まれている。栽培活動で対象の変化に気付く、それらを他の児童と共有したり絵や文字で表現したりすることで児童一人ひとりが異なった感性を発揮することができるのではないかと考える。

鈴木は感性の仕組みと側面を事例に沿って述べている。事例は、『園庭にあるハウセンカに青虫がついていたが、図鑑で調べてもわからなかったため、飼うことになった。枯れてしまったハウセンカを誰も見ることはなかったが、A男は観察し続けたところ、サナギになっていることを嬉しそうに報告した』という内容である。また鈴木は「感性とは、自己の内奥にのみ向かうのではなく、他者を含めた社会・環境に向かっており、自己の社会化の程度、すなわち自己理解と他者理解の程度が、感性の形成や発揮を規定していると考えられた。」⁷⁾と述べている。この事例から鈴木は、「A男は青虫を『好奇心と観察力をもって』『繊細に立ちどまって』感受し、自身のそれまでの経験と交流させている。そして『自分にとって大事なことが自分の心の中心になって』得られた情報を直感的または一部では客観的に認識し分別・判断し、発信の方向を探っている。そして、それがエネルギーとなり『探究、試行錯誤を繰り返す』ようにハウセンカを見続け、ついにはサナギを発見するかたちで自らの思いを創出させている。」⁸⁾と述べている。

A男は青虫に興味を持ち、観察し続けたことによって、サナギに変化したことに気付くことができた。観察し続けることは簡単なことではない。A男にとって青虫は特別な存在であったのではないだろうか。そのため、サナギに成長したことへの喜びを誰かに聞いてほしいという思いが芽生えたのではないかと考える。そして鈴木は、「感性は他者とのコミュニケーションを促進させる基盤となる可能性を見いだされ、幼児期の感性を社会へのかかわり方という核によせて検討を重ねる意義が見いだされた。」⁹⁾とも述べている。他者とのコミュニケーションとは友人や教諭のことだが、小学校生活科の栽培活動での対象のもののつまり、植物や生き物に心を寄せることでも感性を働かせることができるのではないだろうかと考える。

幼児期では、幼児期までに育ってほしい10の姿に「豊かな感性」がある。そのために身近な環境や身近な自然物との関わりを通して、感性を育てていくことがわかる。

2 生活科における豊かな感性

新美は、感性を豊かに働かせる子どもの姿として「③：感性を豊かに働かせることは、対象に広く深く共感しようとすることである。具体的には、対象とつながりをもつものの出す刺激や、対象から出る小さな刺激まで感受しようと、主体的に共感するこ

とへ向かっている姿である。」¹⁰⁾と述べている。対象との関わりを通して、子どもが持っている豊かな感性が引き出されるのではないかと考える。感性は、一人ひとり異なるため、オリジナルの表現が生まれるという効果があると考ええる。また、新美は「生活科は、直接体験の充実とそれを通した表現活動の重視が肝要であることがわかる。対象へ直接関わり働きかけることによって得られた気付きや思考といった学びは、表現活動において整理することで習得される。」¹¹⁾そして、「生活科においては、子どもが直接体験を通してもった対象への思いや願いを基に活動し、その過程では、表現活動を通して思考や判断や表現を一体的に行っていると言える。」¹²⁾と述べている。直接体験を通して、対象への思いや願いを持つことで、学習意欲が向上し、対象への関わり方や表現力がより良くなるのではないかと考える。

豊かな感性を働かせる栽培活動の指導方法として、新美は、「感性を豊かに働かせる栽培活動の指導方法として、直接体験の機会には、子どもに対象とのつながりを意識させて、精神的な距離の縮まりを促すような指導上の工夫を行いつつ、体験時には諸感覚を使ってより多くの刺激を感受できるようにすることが肝要だと考えられる。そして、表現活動の機会には、子どもが対象の植物の気持ちを想像できるようになることを目指して、対象との対話を行わせることが肝要だと考えられる。」¹³⁾と述べている。対象との関わりを通して、諸感覚を使って気付くことができ、対象との対話を通して、対象の植物の気持ちを想像することで、愛着を持って育てることができ、子ども自身がもっている表現を引き出すことができると考える。表現を引き出すためには、アサガオと関わる場面や対話する場面で、自分とアサガオだけの空間を作ることで、自分自身が持っている感性を働かせ、アサガオの気持ちを表現することができると思う。

中島は、「価値ある体験的活動の位置付けにより、子供は、その時々々の感動を言葉にする。その言葉のよさや温かさの事実気付かせることによって表現力が培われている。対象と愛情をもってかかわることにより、気付きや自然・社会認識が育っていく。一つ一つのものが成長してゆくドラマを見たり、それに素直に感動したりする心が大切である。」¹⁴⁾と述べて

いる。対象のものを愛情持って関わることで、自然に社会認識が育つことがわかる。活動には価値のある内容にすることで、その場で生まれた感動を表現することができる。また、中島は、「豊かな感性は、子供が具体的な活動の中で、心が揺さぶられ心に残るような感動体験を積み重ねることによって育っていく。」¹⁵⁾そして、「自分とは異なる生き物や人間の立場とか気持ちとかを理解して、共感したり思いやったりする優しさへの感性が育つのである。対象と一体化できる価値ある体験的活動を展開することによって、子供はイメージを豊かに膨らませ、自分なりに表現したり、友だちに伝え合ったりしながら共生の心を育むことができる。」¹⁶⁾と述べている。価値のある体験活動の中に「表現する」「伝え合う」ことのできるような授業を展開することで、本来持っている豊かな感性を働かせることができるのではないだろうかと思う。

生活科での栽培活動は価値のある内容にすることが重要である。栽培活動は長期活動のため、対象のものと関わる中で、いろいろな場面に遭遇し、その時の自分自身の思いや願い、感情、生まれた感情を表現できると考える。言葉で表現できる場面を設定するためには、アサガオと対話する時の環境や友達同士との交流が欠かせないと思う。

Ⅲ 対話活動と記録カードの分析

1 対象との関わり

2 学年の大豆栽培で物語作りの実践を行った柿崎は、「植物に名前をつけ、『君・さん』と呼ぶことで、子どもたちは想像の扉が開かれたかのように、植物のことばを書き始めた」¹⁷⁾と述べている。また、「擬人化された『植物の声』は、栽培活動・体験におけるその子の『内なる声』でもある」¹⁸⁾とも述べている。このことから、柿崎の事例は2 学年の栽培活動だが、擬人化するような対話活動を通して1 学年のアサガオ栽培においても生きているアサガオの心情を想像することもできるのではないだろうか。

松村はアサガオ栽培の単元において疑似子育ての方法という手立てを使用している。『疑似子育てとは。自分のアサガオのお父さんやお母さん(家族)になって栽培する方法である。ただ、水やりをするだけではなく、毎朝「おはよう」と声を掛けたり、「大きくなってね」と話しかけたりすることで、アサガオと

自分とのかかわりが深まっていく』¹⁹⁾と述べている。松村は、この手立てを使用し、栽培活動を通してアサガオになりきって自分に手紙を書いている場面がある。『ある児童は、「いつもお世話してくれてありがとう。明日もあげてね。棒も立ててくれてありがとう。暑くても水をくれてありがとう。」と書いてあった。』²⁰⁾と述べている。ここからは、自分のアサガオと対話をし、関わることによってアサガオの立場に立って気持ちを考えることができるのではないかと考える。そして、リース作りの際、『「まだ生きている」「まだ抜きたくない」という意見がたくさん出たため、急きょ中止にしたこともあった。』²¹⁾とも述べている。アサガオが自分の家族となり、生きているものとして捉えている姿がわかる。

新美は、アサガオ栽培の対話活動の中で「種をまいてから1ヶ月の間、関わり続けてきたアサガオとの対話では、『大きく育つよ』や『葉っぱを大きくしていくね』と、子どもの願いが反映されたと考えられるアサガオの言葉が見られた」²²⁾と述べている。加納は「何度も何度も個と対象はその間を循環させ、まるで両者は対話しているかのようにその関係を深めていく。」²³⁾と述べている。繰り返しアサガオと関わりを持つことで、アサガオと対話しているように感じ、アサガオとの関係性が徐々に深まっていくことがわかる。新美は、「子どもとアサガオの対話では、アサガオが子どもへ感謝を伝えているような発言が見られた」²⁴⁾と述べている。アサガオから感謝の言葉が生まれるということは、自分自身がアサガオと濃い時間を過ごし、お世話を頑張っていたからこそ、アサガオの立場に立つと感謝の言葉が生まれてくるのではないだろうか。

また近藤も、『アサガオから吹き出しが付けられ『どうもありがとう』と言っていることから、対象から感謝されるに値するくらいアサガオと関わりをもち、開花までお世話を続けてこられた自分のよさを実感していることが分かった。』²⁵⁾と述べている。アサガオとの対話活動を通して、自分からアサガオへの感謝だけではなく、アサガオから自分への感謝の言葉が生まれることは、対象とじっくり関わることや愛着を持ってお世話することができているからこそであると考えられる。そして「栽培活動での対象の植物と対話を行わせることによって、子どもが今までに経験してきたことを基にしながら対象の感情を想像し、自分らしさあふれる表現をする可能性が示唆される。」²⁶⁾と述べている。矢野は、「子どもが関わる自然の事物・現象は、思い通りにならない

ことの方が多い。どんなに自分が餌を食べようとはしない。どんなに自分は抱きたくても、嫌がって抱かせてくれないこともある。そんな体験を通して、子どもは相手を意識し、相手の立場で考えることの大切さを学んでいくのである。」²⁷⁾と述べている。また、小野寺・藤井は昆虫を題材として、昆虫の立場に立って考える授業実践をしている。この実践から、昆虫の気持ちを考えるとき、対象の昆虫になりきって考えているのではないかと考える。小野寺・藤井は、「生活科の授業において、昆虫と直接触れ合う活動の中に、昆虫の立場に立って考える場面を設け、さらにその場面で児童が発する昆虫の本来の生命・生態・自然についての考えを取り上げることは重要である。そうした機会は児童が生活科から理科へと学習を進め、自然と人間との共生についての認識を深めていく過程において、その基盤の形成に役立つと考えられる」²⁸⁾と述べている。対象の立場に立って気持ちを考えることで、お世話の仕方にも変化が生まれる。そして対象と対話することによって、対象の気持ちを想像し、表現することができる。従って、対話活動でじっくり関わったり触れ合ったりする時間を作っていくことが必要だと考える。

2 各記録カードの表現の表れ方

一般的な生活科の記録カードは、教科書に記載されている観察記録的なものが多い。東京書籍『どきどき わくわく あたらしいせいかつ上』に記載されている記録カードには、「そふとくりいむみたいなかたちでした。むらさきいろのはながさきそうです。たのしみです。」²⁹⁾と書かれている。このような記録カードではアサガオの成長の様子を絵や文章で記録していき、アサガオの大きさ、葉の枚数、触ったりにおいを嗅いだりして感じたことや気づいたことも書くことが多い。

アサガオ栽培で対話活動の実践を行った斎藤の記録カードでは、ふき出しを用いて、アサガオから自分への言葉「やっとみんなに会えた」と自分からアサガオへの言葉「あっちゃん、(アサガオの名前)はじめまして」³⁰⁾と書かれている。ふき出しを使用するとアサガオを生きている相手としてとらえ、自分の心情を語り、アサガオの気持ちが表れる。しかし、小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説生活編の生活科では、「動植物の特徴、育つ場所、世話の仕方、変化や成長の様子に気付くことはもちろん、それらと自分との関わりに気付いたり、自分自身の世話の仕方や世話をしてきた心持ちの変容などに気付いたりすることも大切にしたい」³¹⁾と述べられて

いる。ふき出しの記録カードではアサガオへの心情はより表れるが、アサガオの成長の様子を見て、気付いたことなど書きにくいと思われる。生活科では「気付くこと」を大切にしているため、ふき出しの記録カードに気付いたことも書けるように工夫するのも必要なのではないかとと思われる。

また、柿崎は記録カードを手紙の形式を使用してアサガオ栽培を行っていた。この手紙には「あさがおさんへ はやくでてきてね。あさがおさん はやくそだってね。まってるよ。でてきてくれてうれしいよ」(5/29)³²⁾や「あさがおさんへ。まえは、ちいさかったけど、つぼみがふえてて うれしかったです。また、おおきくなってください。」(7/10)³³⁾「あさがおさんへ。つるがのびてうれしい。いつも、はなは ないけど、たねのほうがおおい。がんばってあさがおをさかせてね。」(11/5)³⁴⁾と書かれている。ここでは、アサガオを観察したときの気付いたこととその時、アサガオに向けて呼びかけている自分の心情が書かれている。

1年生が文章を書いて表現することは難しいと言われている。しかし近藤は「子供たちには、その発達段階だからこそもち得ているみずみずしい表現力がある。」³⁵⁾と述べている。児童が持っている感性を働かせ、対象のものとの関わりを通して、児童が持っている表現力を引き出すことが重要である。そして「繰り返し対象に働きかける活動を通すことで、実感を伴った気付きを得たり、実感したことを自分の言葉や動作で表現したりすることができるようになる。」³⁶⁾とも述べている。対象とのかかわる時間を繰り返し行い、その結果気付いたことや想像したことを表現することができるとわかる。

IV 実践の構想

幼児期に育ってほしい10の姿に「豊かな感性」がある。児童は幼稚園・保育園での生活や体験活動を通して、豊かな感性が育まれていることがわかる。その育まれた感性を生活科の授業で発揮できる場面を作りたい。中島は、感性を育てるために「環境」が大切だと述べている。アサガオとの対話の場面で、環境構成も必要と考える。対話活動をするときに、自分のアサガオと対話ができるように自分の机にアサガオを置き、自分のアサガオと自分との空間をつくる。そのような環境を設定することによって、自分とアサガオだけの世界観の中でアサガオの気持ちを想像したり考えたりしやすくなるのではないかと考える。場面ごとに記録カードを使い分けたい。ア

サガオとの対話した内容をふき出しを使用した記録カードにすることで、表現することができると考える。アサガオとお別れの場面は、児童の思いがあふれる瞬間だと考え、手紙形式を使用することで、児童の気持ちや思いが表現できるのではないかと考える。小野寺・藤井は「相手の立場に立って考える」ことが大切だと述べている。栽培活動では「間引き」の場面がある。そこで、児童がアサガオの立場に立って気持ちを考えることで「抜く」「抜かない」の意見に分かれ、児童が心の中で葛藤する様子を見ることができないのではないだろうか。そして、栽培単位において児童同士の意見交流の場を設けることで、考えたことや思ったことを発表し、日々アサガオに対しての向き合い方、関わり方、お世話の仕方など、児童が自ら考えて行動することができるのではないかと考える。また、今回の実践では、記録カードを工夫し、「観察カード」「手紙式カード」「対話カード」の3種類を用意する。観察カードでは、主にアサガオを観察して諸感覚を働かせながら気づいたことを書くようにしていく。手紙式カードでは、アサガオに対しての自分の思いや願いが書けるようにしていく。対話カードには、自分が朝顔に話しかけた言葉とアサガオから自分に話した言葉の両方をふきだしを使用し、描けるようにしていく。その対話の様子からアサガオとどんなお話をしたのか、どんな関わりをしたのか読み取っていく。

以上のことを踏まえ、私の単元計画は以下の通りである。

単元計画

時数	学習内容
第1時	○ふしぎ種と出会い。 ・学校で育てている野菜や果物を知る。 ・その中で先生からふしぎ種をもらい、自分たちの力で育てるという意欲を高める。
第2時	○種に名前をつけ、観察しよう。 ・種の色、におい、形といった五感を働かせる活動を行う。 ・種に名前をつけ、発表する。 ・ふしぎ種の正体は明かさない。
第3時	○種を植えよう。 ・1人1鉢用意する。 ・土を入れ、種を6個植える。

	<ul style="list-style-type: none"> ・お世話の仕方を知る。 ・水をあげるときにふしぎ種にどのように声をかけるかを考える。
第4時	<p>○芽の観察をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・葉の枚数や色、におい、茎の色などに着目して観察し、カードに記録する。
第5時	<p>○ふしぎ種に話しかけてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな言葉をかけるのか考え、ふしぎ種に話しかけに行く。 ・話しかけた言葉を記録カードに記入する。 ・「大きくなあれ」「何が咲くのかな」という発言を期待する。
第6時	<p>○間引きについて考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「種」「双葉」「本葉」という言葉を押さえる。 ・間引きについて知る。 ・間引きをするかしないかを自分で考え、意見を発表する。 ・児童がアサガオの気持ちに寄り添って考え、心の葛藤が表れることを期待する。
第7時	<p>○ふしぎ種の正体を調べよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふしぎ種がどんな植物の種なのかを、教科書で調べる。 ・正体がわかったふしぎ種に手紙を書く。 ・「アサガオになるんだね」「きれいな花が咲いてほしいな」という意見を期待する。
第8時	<p>○ツルの観察をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ツルにも毛が生えていることやツルの先端の形に着目して観察する。
第9時	<p>○支柱を立てよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支柱という物を知り、どんな役割をするのか理解する。
第10時	<p>○つぼみの観察をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つぼみの形を観察し、何色の花が咲くのか予想する。 ・つぼみの数を数える。

	<ul style="list-style-type: none"> ・1組は手紙形式、2組は対話形式の記録カードを使用する。
第11時	<p>○アサガオの花を観察しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花の色や模様に着目して観察する。 ・1組は対話形式、2組は手紙形式の記録カードを使用する。
第12時	<p>○種を収穫しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・できた種を収穫し、数を数える。 ・種をどうするのかを考える。
第13時	<p>○枯れたアサガオをどうしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・枯れてしまったアサガオをどうするのか考える。
第14時	<p>○お別れの手紙を書こう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アサガオにお手紙を書く。 ・「寂しい」といった別れを惜しむ言葉や「ありがとう」といった感謝の言葉が表れると期待する。
第15時	<p>○リースを作ろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アサガオの葉や花を取り、ツルだけにする。 ・茎を切る時の子どものつぶやきに着目する。
第16時	<p>○リースの飾りつけをしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家から持ってきたもので飾りつけをする。

導入では、アサガオ単元の最初場面でもあるため、畑の先生から小学校で育てている花・野菜などを紹介してもらい、子どもたちが興味・関心を持てるようにする。その中でアサガオの種と出会う。ここではアサガオの種と明かさず「ふしぎ種」と呼ぶことで、どんな花が咲くのかワクワクしながらお世話をする姿を想定する。畑の先生からふしぎ種をもらうことで「頑張って育てる」という意欲的な姿が見られることを期待する。第2時では、種の観察をし、種に名前をつける。「〇〇ちゃん」「〇〇くん」と名前をつけることで身近な存在と認識し、アサガオと自然に対話することができるのではないかと考える。

種の絵を描くときに色の工夫が見られたり「色」「におい」「形」など気付いたことを書く姿を期待する。第5時のふしぎ種に話しかける場面では「大きくなあれ」「何が咲くのかな」といった声掛けを期待する。また、話しかける場面として、環境づくりが大切だと考える。そこで、児童とアサガオだけの空間にするために、教室の机にアサガオの鉢を置き、話かける時間を設ける。第6時の間引きの場面では、間引きをしたいかしたくないかを発問し、児童が心の中で葛藤している様子を期待する。したい派では「大きく育てほしい」「病気になってほしくない」という意見が出ると考える。したくない派では「せっかく育てたのに抜きたくない」「抜くのはかわいそう」といった自分自身の気持ちとアサガオの立場になって意見を言うのではないかと考える。第10時・第11時では記録カードを「手紙形式」と「対話形式」の2つを用意し、子どもたちの表現を比較していく。手紙形式の記録カードには、アサガオに対して自分の心情を表現することができると考える。「どんな色の花が咲くのかな」「楽しみ」といった花が咲くことをわくわくしている様子が感じられる文章が書かれるのではないかと考える。対話形式ではアサガオと自分自身が対話し、「お水はおいしいですか?」「おいしいよ。もっと飲みたいな」といった対話をするのではないかと考える。子どもは感性が豊かであることが先行研究からわかったため、アサガオを身近な存在と認識し、日常で行われるような対話が見られるのではないかと考える。第14時のアサガオとお別れをする場面では、手紙を用意し、児童からアサガオに対しての感謝の言葉「元気に育ってくれてありがとう」「きれいな花をいっぱい咲かせてくれてありがとう」や「お別れをするの寂しいな」といった寂しさを感じることができるような言葉の表現が表れることを想定する。第15時・16時のリース作りでは、アサガオを切る時のつぶやきに注目したい。「ありがとう」や「切っちゃってごめんね」と言いながら切る姿を期待する。リースの飾り付けでは、秋の実を使用する。木の実の付け方は一人ひとり異なり、どのように今まで育てたアサガオを自分の思いに沿って表現することができると考える。

V おわりに

先行研究から①幼児期に感性が育まれていること、②対象のものと関わる中で、子どもたちの豊かな感性が引き出され、表現できること、③対話するにあたって対象のものを身近な存在として認識し、対話

できる空間を作ることが大切、という3点がわかり、上記の単元計画ができた。方向性として、単元計画を基に実践を行っていないことから、実際の子どもの様子や行動、表現などが把握できていない。また、実際に感性を働かせていることを言い切ることは難しい。そのため、実践をし、子どもの実態を考察する必要がある。

参考・引用文献

- 1) 加納誠司「生活科における『活動や体験』の意義を生かした授業づくりの展望—『体験』から『表現』への思考の変容に着目して—」日本生活科・総合的学習教育学会誌 せいかつ&そうごう 第30号 2023年3月 p.38
- 2) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編」2019年 p.43
- 3) 上掲書 p.43
- 4) 斎藤浩平「子供が自分事として主体的に取り組む栽培活動の一考察」生活科・総合の実践ブックレット 第11号 2017年 p.24
- 5) 上掲書 p.32
- 6) 内閣府 文部科学省 厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」2017年3月 p.298
- 7) 鈴木裕子「幼児の感性を具体化する試み—幼児期の感性尺度の開発を手がかりとして—」保育学研究第47巻2号 2009年 p.38
- 8) 上掲書 p.30
- 9) 上掲書 p.38
- 10) 新美諒 加納誠司「生活科において感性を豊かに働かせる意義」愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第6号 2021年3月 p.157
- 11) 上掲書 p.159
- 12) 上掲書 p.159
- 13) 新美諒「生活科において子どもが感性を豊かに働かせる栽培活動の研究」生活科・総合的学習研究 第14号 2020年 p.42
- 14) 中島美恵子「豊かな感性と認識を育てる環境教育（1）—生活科を中核とした合科的な指導—」1999年12月 p.43
- 15) 上掲書 p.43
- 16) 上掲書 p.43
- 17) 柿崎和子「『体験活動』と『言語活動』の連動による学び—『種から植物を育てる活動』を振り返る『物語作り』の学びの可能性—」生活科・総合的学習研究 2013年 p.162

- 18) 上掲書 p. 162
- 19) 松村英治「アサガオの家族になってお世話しよう～疑似子育てによる生活科の栽培单元～」 p. 60
- 20) 上掲書 p. 63
- 21) 上掲書 p. 64
- 22) 前掲書 13) p. 45
- 23) 加納誠司「個別最適な学びと協働的な学びの充実が『主体的・対話的で深い学び』の実現につながる」 明日も学びたくなる生活科 大日本図書 2021 年 週刊第 2 号
- 24) 前掲書 13) p. 45
- 25) 近藤彩子「自分自身への気付きへと高める生活科学習についての研究—メタ認知を機能させた活動を通して—」 愛知教育大学大学院 実践研究報告書 2023 年 p. 5
- 26) 前掲書 13) p. 45
- 27) 矢野英明「子どもの人間としての成長を意識した生活科・総合的な学習の時間の在り方についての一考察 —自然の事物・現象に関わる活動を重視することを通して—」 2010 年 10 月 p. 32
- 28) 小野寺かれん 藤井浩樹「昆虫の立場に立って考えることについての低学年児童の認識」 2023 年 p. 70
- 29) 東京書籍 『どきどき わくわく あたらしいせいかつ上』 2021 年 p. 34
- 30) 前掲書 4) p. 27
- 31) 前掲書 2) p. 43
- 32) 柿崎和子 学級通信 「えがお」 2019 年
- 33) 上掲書
- 34) 上掲書
- 35) 前掲書 25) p. 2
- 36) 前掲書 25) p. 4